

評価と学習指導

— 学習法の診断と指導 —

大 村 清

目 次

- I 調査の結果とその考察
 - (1) F A Tの結果と学業成績の関連
 - (2) F A Tと知能検査と学業成績の関連
 - (3) F A Tの各領域と学業成績の関連
 - (i) “学習意欲”の領域において
 - (ii) “教師との関係”の領域において
- II “学習不適應の早期発見とその指導”
 - (1) F A Tで問題ある事例
 - (2) 早期発見の必要性和指導

学力を向上させる大きな要因である生徒の学習意欲や心身の健康、人的、物的環境などについて「学力向上要因診断検査 (F.A.T The Factor's Diagnosis Test of Achievement-Advancement 日本文化社)」を用い、中学3年140名実態を調査した。

1 調査の結果とその考察

(1) F A Tの結果と学業成績との関連

次のような方法で検討した。学内の学力試験(数学、国語、英語、社会、理科、55年11月実施)の結果を学業成績とし、学力の成績の上位の者(30名)を成績上位群、下位の者(30名)を下位群とし、学業成績とF A T偏差値と各領域の得点との関連について調べてみた。(表1 図1参照)

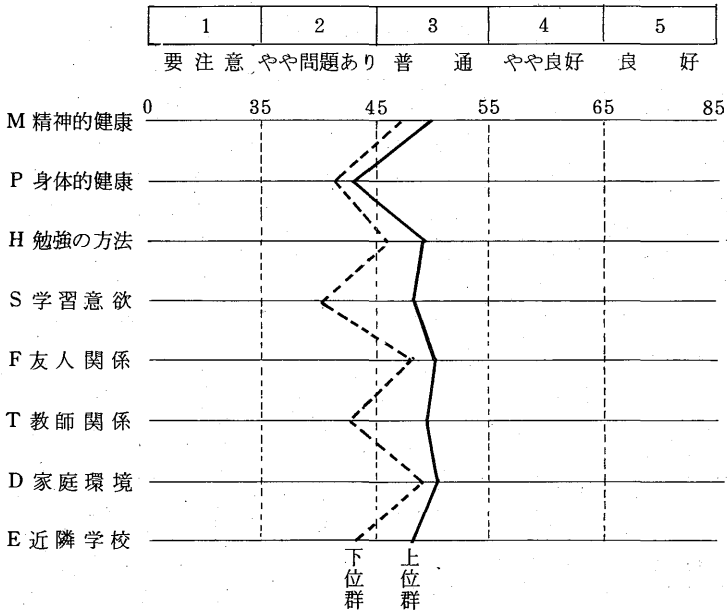
その結果から、「学習意欲のあるもの」、「教師との関係がうまくいって

るもの」、「勉強方法が確立されているもの」、これらのものは学業成績がよいと言えよう。さらに「家庭の環境」「身体的健康」の領域では、成績上位群と下位群の差は少ないと言えよう。従って今後の指導面において、「いかに

表1 成績と各領域の得点と偏差値

領域偏差値		精神的健康度	身体的健康度	勉強の方法	学習意欲	友人関係	教師関係	家庭環境	近隣学校
成績	M SD								
成績上位者	M	50.8	44.5	49.6	48.9	51.4	50.0	51.8	47.6
N=30	SD	9.73	9.96	7.68	10.9	9.17	10.74	8.40	11.36
成績下位者	M	47.1	44.3	45.6	42.5	49.2	44.1	49.8	44.9
N=30	SD	10.9	10.00	8.88	7.54	7.31	9.71	7.17	11.51
差—上位群 下位群		3.6	0.3	4.0	6.3	2.2	5.9	0.7	2.3

図1 成績上位群と下位群のプロフィール



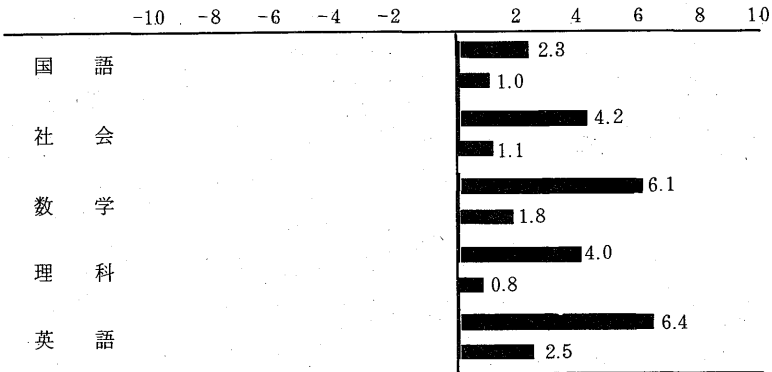
にして学習意欲を高めていくか」ということが最も重要な課題である。そのためには教師と生徒との間のコミュニケーションを改善していくこと、勉強方法の指導にも力をいれていくこと。それらの問題を検討しなければならない。^(註1)

成績上位群は全ての領域で（学習意欲+6.3, 教師関係+5.9, 勉強方法+4.0, 精神的健康度+3.6, 友人関係+2.2, 近隣・学校環境+2.3, 家庭環境+0.7, 身体的健康度+0.3）下位群よりも得点が高かった。

(2) F A T と知能検査と学力試験との関連

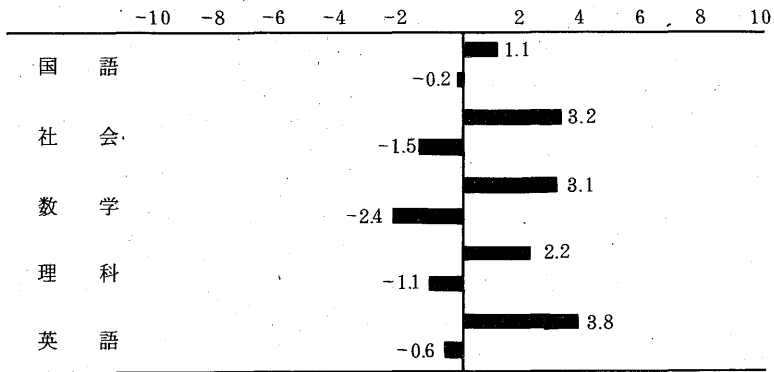
知能検査と学力試験, F A T の三つの検査を実施し, 次に知能検査の結果と学力試験の結果から, ひとりひとりの生徒の成就値（実際の学力と知能から予想される学力との差）を計算した。さらにF A T の結果, 上位者と下位者とに分け, それらの者が各教科でどのような成就値を得ているかを知能段階別に示すと, 次の（図2）のようになる。

図2 知能段階ごとのF A T 上位群と下位群の成績値の比較

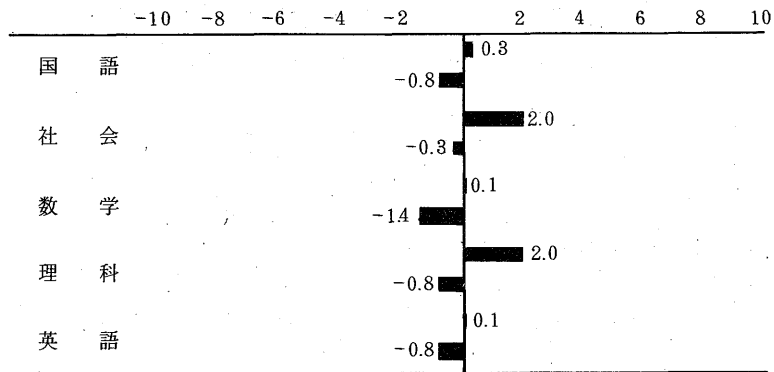


（知能偏差値65～74まで） ■ 上位者 □ 下位者

評価と学習指導



(知能偏差値55～64まで)



(知能偏差値45～54まで)

その結果から、①知能偏差値65～74までの生徒について、5教科においてFATの得点の上位者、下位者とも成就値はプラス。しかし、FATの上位群が下位群よりも成就値は大きい。知能がすぐれている場合でも、学習適応性が良いもののほうがそうでないものよりも、学力が高くなる傾向にあるといえよう。②知能偏差値55～64までの生徒について、5教科においてFATの上位者群の成就値はプラス、下位群の成就値はマイナス。③知能偏差値45～54までの生徒については、5教科においてFATの上位群の成就値はプラス、下位群はマイナス。

以上、知能の3段階について、学習適応性の上下と成就値との関係のみ

ると、結論として、知能の上下にかかわらず、学習適応性のすぐれている者のほうが、その劣る者よりも5教科のすべてにおいて学習効果をあげることができる。とくに知能段階の「中」の者は、学習適応性がわるいと、アンダー・アチバー学習不振に陥りやすい^(註2)

(3) F A T の各領域と学業成績との関連

「学習意志」「教師との関係」「勉強の方法」の領域で成績上位群と下位群の項目別の差を概観し、望ましい学習能力や学習方法について検討した。

(i) “学習意欲”の領域において

		成績上位群	下位群
○先生や親から注意されないで、自分から進んで勉強していますか。	いつも	57%	0%
	いいえ	13%	23%
○時間を忘れて勉強することがありますか	ときどき	43%	3%
	いいえ	26%	30%
○成績の悪い科目を勉強して成績をよくしようと努力していますか。	いつも	27%	10%
	いいえ	7%	10%
○毎日、決めて勉強している科目がありますか。	はい	40%	13%
	いいえ	20%	50%
○好きな科目には熱中するほうですか。	はい	63%	27%
	いいえ	7%	3%
○好きな科目をつくり、将来に役立たいと思っていますか。	ときどき	60%	26%
	いいえ	13%	34%

「先生や親から注意されないで、自分から進んで勉強するもの」は成績上位群に多く、ほとんど自発的に勉強できないものが下位群に多い。「好きな科目に熱中することができる」、あるいは「好きな科目をつくり、将来に役立たいと思う」と答えたものが成績上位群に多い。従って、生徒の目的意識を明確にする。あるいは、生徒の個々の特性を十分に伸ばすよう、総合的な面から学習意欲を高めていく指導が大切であると言えよう。

次の「学習意欲」に関する調査で、どのような場合に学習意欲をもつことができたかという問いに答えたものである。最も多くの生徒が答えたのが「授業内容がよく理解できるとき」である。逆に学習意欲を失ったときと答えたのが、「授業内容が理解できない」である。従って、問題は教師の

指導方法やカリキュラム，教授法など教師の側にあると言えよう。

学習意欲に関する調査

“学習意欲をもったとき” はどういうときでしょうか。

- 授業内容がよく理解できるとき 55%
- 好きな教科のとき 43%
- テストの結果が予想外に悪いとき 43%
- 気持ちがおちついたとき 30%
- テストの結果が予想外に良いとき 24%
- からだの調子のよいとき 16%
- 先生にほめられたとき 8%
- 家の人にほめられたとき 6%
- 友だちの間がよいとき 5%

その反対に“学習意欲を失ったとき” はどういうときでしょうか。

- 授業内容が理解できない 48%
- 嫌いな教科のとき 37%
- 家の人にうるさく勉強するように言われたとき 33%
- からだの調子がわるいとき 31%
- テストの結果が予想外に悪いとき 27%
- 友だちの間がわるいとき 23%
- 嫌いな先生のとき 21%
- 先生にしかられたとき 9%
- 家の人にしかられたとき 8%

(ii) 教師との関係” 領域において

		成績上位群	下位群
○好きな先生ときらいな先生がいますか。	きらにな先生が多い	6%	23%
	好きな先生が多い	17%	14%
○先生に注意を受けることが多いですか。	いつも	3%	17%
	いいえ	27%	13%
○先生にしかられると、いつまでも	いつも	27%	10%

気になりますか。	いいえ	46%	33%
○あなたは、先生にあらためてほし	はい	23%	45%
いと思うことがありますか。	いいえ	37%	27%

学校生活で教師と生徒の関係は重要なものであることは言うまでもない。この教師と生徒という関係がうまくいかないとき、学業不振が生まれてくる。「先生が好きである」とか、「授業をおもしろく教えてくれる」「よくわかるように教えてくれる」などの理由から、教科そのものがすきになった、きらいになったという。そのように教師のパーソナリティーや指導方法などが生徒の学習意欲や成績に大きな影響力をもっていることがわかる。

(iii) “学習の方法” 領域において

		成績上位群	下位群
○気分がすぐれているとき、好きな科目や得意な科目から勉強しはじめますか。	いつも	73%	53%
	いいえ	6%	10%
○よく使用する辞書や参考書はいつも手元にありますか。	いつも	63%	33%
	いいえ	6%	23%
○答案は、かならず見直していますか。	いつも	80%	16%
	いいえ	0%	3%
○休暇中、自分の不得手な科目に力を入れてやりますか。	ときどき	27%	7%
	いいえ	13%	30%
○勉強と遊びとけじめをつけていますか。	いつも	37%	10%
	いいえ	17%	17%

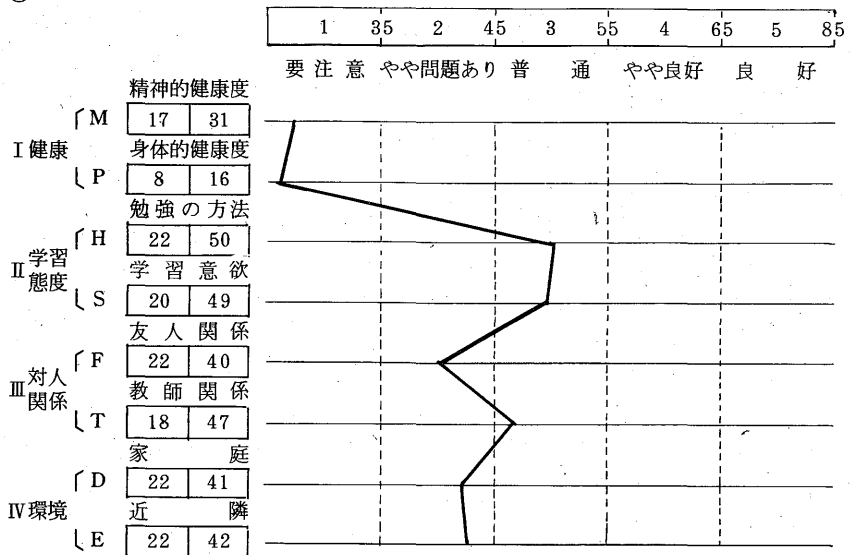
学習方法も重要なことがわかる。学習の習慣や技能についても学業成績上位群と下位群の間には大きな差異がみられる。生活習慣に関するものとして「時間がくると、すぐに勉強にとりかかる」「ラジオを聞きながら勉強する」「家で勉強するときには、だいたい時間が決まっている」。学習態度に関するものとしては、「どうにもならなくなるまで、先生や他の人の助けを借りない」「勉強をしているとき、それを終わらせるまでがんばる」「問題を表面的に受けとらないで、深くつっこんでみる」。学習技能に関するものとしては、「ノートをとるとき、意味をよく考えながらとる」「新しいことを習うときには、それまで習ったことを振り返ってみる」「試験の準備の

ときに、習ったことを簡単にまとめて書く」「新しいことばは一応辞書で調べる」「外国語の新しいことばを覚えるときには、それまで習ったことばと比べてみる」。などの項目に学習上位群と下位群との間に差がみられた^(註3)

II 学習不適応の早期発見とその指導

(1) FATで問題ある事例

①〔事例1〕図3



A子のプロフィール“からだの健康”“精神的健康”の領域で1（要注意）の段階である。“友人関係”“家庭環境”“近隣学校”の領域は2（やや問題あり）の段階である。A子の知能偏差値は49で「3」段階である。学業成績もよく国語（3）、数学（5）、英語（5）、社会（4）、理科（4）である。その点ではほとんど問題にならない生徒である。しかし、身体的に何か問題があるようである。“からだの健康”で次のことが目につく、

○朝、目がさめたとき頭の中がすっきりしていますか。

（いいえ）

○疲れやすいほうですか。

（はい）

○からだの事が心配で勉強に遅れることがありますか。

- (ときどき)
- あなたは食欲があるほうですか。(いいえ)
- 早ね早起きのほうですか。(いいえ)
- よく眼の疲労を感じますか。(ときどき)
- よく、頭痛がしますか。(ときどき)
- 次に“精神的健康”では、
- だれとでもすぐなか良くなるほうですか。(いいえ)
- あなたは、ふしあわせな人間だと思えますか。(ときどき)
- 心配なことがあって、勉強しても頭にはいらなないことがありますか。(ときどき)
- テストが近づくと病気になることがありますか。(ときどき)
- いやなことがあると、いつまでも忘れないほうですか。(はい)
- テストの結果をいつまでもよくよ考えているほうですか。(はい)

など答えており、精神的面での不安や悩みの原因はどこにあるのか。分析の必要がある。同時に身体的健康を増進させることに十分に配慮して指導していかなければならないと考える。

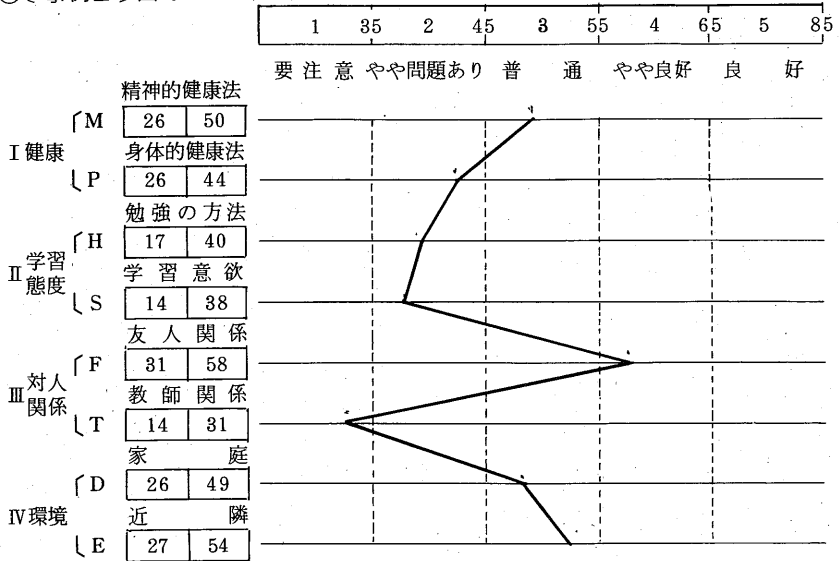
さらにA子の“家庭環境”が気になる。

- 家庭全体が規則的な生活をしているか。(いいえ)
- 兄弟げんかや親子の言い争いがありますか。(ときどき)
- 家庭がおもしろくなくて、家出したいと思うことがありますか。(たまに)
- 家族の人と意見が違って悩むことがありますか。(たまに)

など答えており教育相談などにおいて、徹底的な話し合いをし、家庭の問題、とくに親子関係の分析をし、その改善が必要である。

B子のプロフィール“教師との関係”の領域で1(要注意)の段階である。“学習意欲”と“勉強の方法”の領域は2(問題あり)の段階である。

②〔事例2〕図4



B子の知能偏差値は62で「4」の評価段階である。しかし国語（3），英語（3），数学（3），社会（3），理科（4）の評定段階で，理科を除いて他の4科目において成就値はマイナスである。とくにB子の性格は内向的で成績も中の上で，クラスの中でも目立たない存在であり，問題のない生徒として見逃しやすい生徒である。やはりB子も学習不適應である。

“学習意欲”では次の項目が目につく。

○先生や親から注意されないで自分から進んで勉強していますか。

(いいえ)

○宿題は帰ってからすぐにやるようにしていますか。

(いいえ)

○授業中，質問しますか。

(いいえ)

○授業中話をしないで，先生の話に耳を傾けていますか。

(いいえ)

○毎日，決めて勉強している科目がありますか。

(いいえ)

○毎日，予習復習をしていますか。(いいえ)

○勉強中マンガを読んだり、落書きすることがありますか。

(ときどき)

○好きな科目をつくり、将来に役立てたいと思っていますか。

(いいえ)

次に“勉強の方法”の項では、

○計画をたてて、勉強していますか。(いいえ)

○勉強と遊びとを区別していますか。(いいえ)

○勉強する時間はいつもきまっていますか。(いいえ)

○ラジオやテレビを、きいたりみたりしながら勉強していますか。

(ときどき)

○予習のときたいせつなことは、ノートに書いておきますか。

(いいえ)

などB子の回答がある。“勉強の方法”の検討を加え、さらに重要なことは、B子の学習意欲をそ外している要因、そのために十分に能力が発揮されていない。その要因はなにかを徹底的に見つけ出していかなければならない。そこでB子にとって、教師との生きたコミュニケーションがなによりも必要ではないかと思われる。次に“教師との関係”の項をみてみると、

○親しく話すことのできる先生がいますか。(いいえ)

○先生は、あなたのことをよく知っておられると思いますか。

(いいえ)

○先生にほめられたことがありますか。(いいえ)

○先生に注意を受けることが多いほうですか。(いつも)

○先生はこわいと思いますか。(いつも)

(2) 早期発見の必要性とその指導

学習指導において一般的に早期発見が強調されている。高校2年時に知能は低くないにもかかわらず、学習不適應を起している生徒が、すでに中学1年時にその現象がみえ、それが5年間も引き続くという調査報告がなされている。^(注4)それ故に、学習指導において早期に学習不適應を起している生徒を見つけ、その原因が何であるかを分析し、学習場面にうまく適應していくよう働きかけ、指導することが必要である。

—参 考 文 献—

- 注1 大野栄三郎「学習法の診断—新FATよりみた子どもの実態—(『教育心理』Vol. 27, No. 5, 1979).
- 2 澤田慶輔・内山喜久雄編集「学習不適應の指導」(図書文化), p. 25, 1975.
- 3 富木佳郎 学習習慣 現代教育心理学大系7 中山書店 1957.
- 4 澤田慶輔・内山喜久雄編集「学習不適應の指導」(図書文化) p. 40, 1975.